公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

設立 35 周年記念講演会・シンポジウム

やまとごころとからざえ

和魂漢才

－京都・東アジア交流の考古学－

1　テーマ：和魂漢才－京都・東アジア交流の考古学－

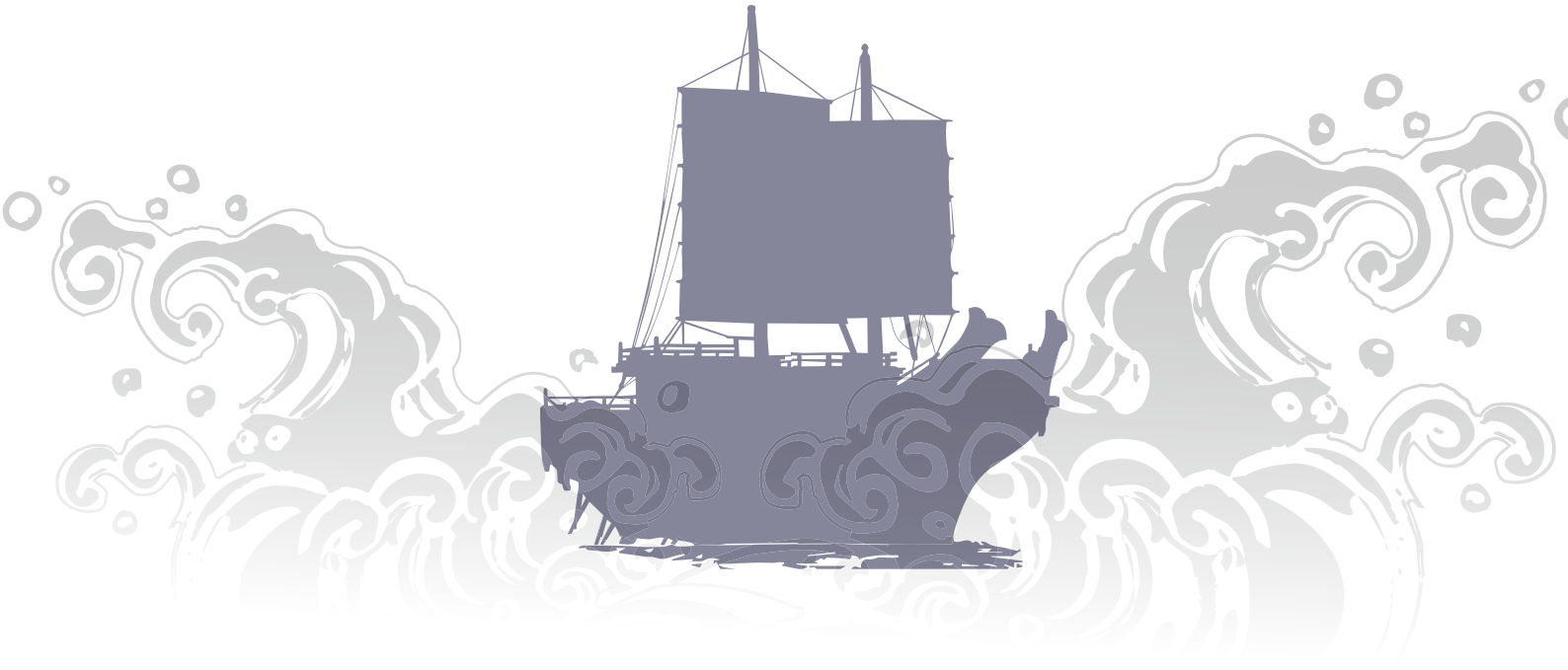
2　日　時：平成 27 年 11 月 29 日（日）12:30 ～ 16:30

3　主　催：京都府教育委員会・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

4　後　援：向日市教育委員会

5　会　場：向日市民会館　ホール　　【聴講無料】

〒617-0002　京都府向日市寺戸町中ノ段 17－ 1



主旨

京都府内では原始・古代から他地域との交流を示す考古資料が数多く確認されています。また、中国や朝鮮半島との交流を示す資料も確認されるに至っています。

今回の記念講演会及びシンポジウム　では、「和魂漢才（やまとごころとからざえ）－京都・東アジア交流の考古学－」と題して、飛鳥・奈良時代から安土桃山時代に至るまでの京都と東アジア及び日本国内のヒトやモノの交流について迫ります。

この講演会及びシンポジウムは、広く府民の方々に埋蔵文化財への理解を深めていただくことと文化財保護に寄与することを目的に開催するものです。

プログラム

12:30 ～ 12:40　**あいさつ**　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長　上田正昭

12:40 ～ 13:10　**記念講演**　古代東アジアと京都盆地
当調査研究センター理事長　上田正昭

13:10 ～ 14:00　**記念講演**　遣唐使“廃止”後の京都と東アジア－平安王朝の背後世界－
当調査研究センター理　事　井上満郎

14:00 ～ 14:15　〈休憩〉

14:15 ～ 14:45　**基調講演**　飛鳥・奈良時代における東アジアの影響－仏教文化を中心に－
京都府立大学教授　菱田哲郎

14:45 ～ 15:05　**基調報告**　考古資料から見た奈良・平安時代における東アジアとの交流
当調査研究センター主　査　筒井崇史

15:05 ～ 15:25　**基調報告**　中世における東アジアとの交流
当調査研究センター副主査　伊野近富

15:25 ～ 15:35　〈休憩〉

15:40 ～ 16:30　**シンポジウム**　進　　行：当調査研究センター理　事　上原真人
パネラー：井上満郎氏・菱田哲郎氏
伊野近富　・筒井崇史
細川康晴（当調査研究センター課長補佐）

設立三十五周年記念講演会・シンポジウム資料

【記念講演】

やまとごころとからざえ

和魂漢才

―京都・東アジア交流の考古学―

古代東アジアと京都盆地　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　理事長　上田正昭　一頁～四頁

遣唐使“廃止”後の京都と東アジア―平安王朝の背後世界―　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　理　事　井上満郎　五頁～十頁

古代東アジアと京都盆地

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長　上田 正昭

1．『新撰姓氏録』の左京・右京の「諸蕃」

新撰姓氏録は、出自によって皇別・神別・諸蕃に分けて記載し、最後に未定雑姓（系譜未詳の氏族）を掲載した。1182 氏の内訳は、左京・右京から和泉国までで、皇別 335 氏・神別 404 氏・諸蕃 326 氏・未定雑姓 117 氏となっている。

平安京の左京皇別は 118 氏であり、右京皇別は 67 氏であって、左京・右京皇別の合計は 185 氏となる。左京神別は 82 氏であり、右京神別は 65 氏であって、その合計は 147 氏であった。ところが左京諸蕃は 62 氏、右京諸蕃は 102 氏で、その合計 164 氏は、左京と右京の神別氏族の合計を抜いている。いかに平安京に渡来系の氏族が多数居住していたかをうかがうことができる。

『新撰姓氏録』の「諸蕃」では「漢」･「百済」「高麗」にわけているが、たとえば「左京諸蕃上」の冒頭には、「太秦公宿禰　秦始皇帝の十三世の孫、孝武王の後なり」とする。これは中国を「大唐」として、新羅系の秦氏の始祖を秦始皇帝に付会したものであって、もとより信頼することはできない。「大宝令」や「養老令」の公文書の様式などを定めた「公式令」の注釈書で、天平 10 年（738）ごろの『古記』に、「隣国は大唐」、「蕃国は新羅」とみなした中華を敬慕しての始祖の改変であった。したがって「漢」の分類のなかには新羅系の渡来氏族もかなり含まれている。

2．秦氏の活躍

高麗氏や漢氏は点的に分布しているのに対して、秦氏は北九州（大宝２年の戸籍や『豊前国風土記』逸文）から東北の出羽（久保田城漆紙文書）まで面的に居住しており、とりわけ京都盆地の開発には大きな役割を演じた。

秦氏のハタについては①機織のハタ説、②梵語の絹布説、③韓国・朝鮮語のパタ（海）説あるいはハタ（大･多）説などがある。多くの人びとは秦氏をハタ氏とよんでいるが、『古事記』では「波陀」と書き、『万葉集』巻第 11 の“朱引く秦もふれずて寐たれども心をけしく我がおもはなくに„（2399）と歌っているように、本来は「ハダ」とよんでいたのではないかと考えられる。大同２年（807）に斎部広成が忌部氏の伝承を中心にまとめた『古

語拾遺』では、雄略朝のできごととして秦酒公が献上した「絹・綿・肌膚に軟らかなり。故秦の字を訓みて波陀と謂ふ」と伝えている。秦の字はもとハダと読まれていた可能性がある。

それなのに秦氏をハタ氏と称してきたのは何故か。独学で朝鮮半島の古地名の研究にとりくんでこられた鮎貝房之進説では『三国史記』の「地理志」に慶尚北道のなかに「波旦」という古地名があるのに注目された。しかし『三国史記』は日本でいえば平安時代末期の成立であって、その信憑性が長く疑われてきた。1988年の３月であった。共同通信が韓国慶尚北道蔚珍郡竹辺面鳳坪里で、甲辰年（524）の新羅古碑がみつかったことを報道した。現地はソウルからかなり遠く、列車とタクシーを乗りついで、日本人では最も早く碑文を実見した。碑文には確実に「波旦」という古地名があり、「奴人法」あるいは殺牛のまつりなども記述した新羅古碑であった。この新羅古碑によってハタ氏のハタは波旦に由来することがきわめて有力となった。現在では秦氏を新羅系とみなし、朝鮮半島南部の東側を直接のふるさととすることが学界でも主流になっている。

（1）「日本書紀」欽明天皇即位前紀

有りて云さく、「天皇、秦大津父といふ者を寵愛みたまはば、壮大に及りて、必ず天下を有らさむ」とまうす。寐驚めて使を遣して普く求むれば、山背國の紀郡の深草里より得つ。姓字、果して所夢ししが如し。是に、忻喜びたまふこと身に遍ちて、未曾しき夢なりと歎めたまふ。乃ち告げて曰はく、「汝、何事か有りし」とのたまふ。答へて云さく、「無し。但し臣、伊勢に向りて、商價して來還るとき、山に二つの狼の相闘ひて血に汙れたるに逢へりき。乃ち馬より下りて口手を洗ひ漱ぎて、祈請みて曰はく、『汝は是貴き神にして、麁き行を樂む。儻し獵士に逢はば、禽られむこと尤く速けむ』といふ。乃ち相闘ふことを抑止めて、血れたる毛を拭ひ洗ひて、遂に遣放して、俱に命全けてき」とまうす。

夢に人

（2）「日本書紀」皇極天皇二年十一月の条

山背大兄王等、四五日の間、山に淹留りたまひて、得喫飯らず。三輪文屋君、進みて勸めまつりて曰さく、「請ふ、深草屯倉に移向きて、玆より馬に乗りて、東國に詣りて、乳部を以て本として、師を興して還りて戰はむ。其の勝たむこと必じ」といふ。

（3）伏見深草遺跡

古墳時代中期のU字形刃先を接着した風呂鍬の普及や畜力耕具である馬鍬の登場は、深草に本拠をもつようになった深草秦氏によってもたらされた農具の革新と考えられている

（上原眞人「お稲荷さんよりも昔の稲作」『朱』号）

（4）秦河勝

葛野秦寺→広隆寺

葛野大堰（「古記」）

松尾大社（大宝元年・秦都理

月読社「秦氏本系帳」）

（大宝元年４月３日の勅）

（「日本書記」顯宗３年２月の条）

「歌荒樔田」

伏見稲荷大社

山背（城）国風土記逸文－秦伊侶具→秦伊侶巨

（和銅４年「社司伝来記」）

長岡京－秦忌寸足長・太秦宅守、平安京－秦忌寸都岐麻呂

「葛野郡班田図」山田郷ほか７郷　總計 114 人－８ 2名秦氏 72%

（井上満郎「渡来人」リプロポート）

3．二つの百済王　と　4．平安京と長安・洛陽

（5）「続日本紀」延暦八年十二月の条

朝臣小黒麻呂寧誄人奉誄。上諡曰天高知日之子姫尊。○壬子十五葬於大枝山陵。皇太后姓和氏諱新笠。贈正一位乙繼之女也。母贈正一位大枝朝臣眞妹。后先出自百濟武寧王之子純陁太子。皇后容德淑茂。夙著聲譽。天宗高紹天皇〔光仁〕龍潛之日。娉而納焉。生今上。早良親王。能登内親王。寶龜年中。改姓爲高野朝臣。今上卽位。尊爲皇太夫人。九年追上尊號。曰皇太后。其百濟遠祖都慕王者。河伯之女感日精而所生。皇太后卽其後也。因以奉諡焉。

（6）「続日本紀」延暦九年二月の条

是日。詔曰。百濟王等者朕之　外戚也。

（7）「続日本紀」延暦六年十一月の条

十一月甲寅。祀天神於交野。其祭文曰。維延暦六年歲次丁卯十一月庚戌朔甲寅。嗣天子臣謹遣從二位行大納言兼民部卿造東大寺司長官藤原朝臣繼繩。敢昭告于昊天上帝。臣恭膺睠命。嗣守鴻基。幸賴穹蒼降祚覆蠶膺徵。四海晏然。万姓康樂。方今大明南至。長晷初昇。敬采燔祀之義。祗修報德之典。謹以玉帛犧齊粢盛庶品。脩茲禋燎。祇薦潔誠。高紹天皇配神作主尙饗。

（8）「方丈記」

この京（みやこ）※のはじめを聞ける事は、嵯峨（さが）の天皇の御時、都（みやこ）と定（さだ）まりにける

※ 平安京は 4.9km、南北 5.7km、
※ 長安城は東西 9.7km、南北 8 .2km　約 $\frac{1}{3}$

右　京		左　京
桃花坊	1条	桃花坊
△銅駝坊	2条	△銅駝坊
△豊財坊	3条	△教業坊
○永寧坊	4条	○永昌坊
○宣義坊	5条	△宣風坊
○光徳坊	6条	△涼風坊 淳風坊
△毓財坊	7条	△安衆坊
延嘉坊	8条	○崇仁坊
開建坊	9条	△陶化坊

洛陽△

長安城は東側を万年県とよび西側を長安県

洛陽城では京中に流れる洛水によって南北を分け、北を洛陽県・南を河南県をよんだ。

長岡京では東を東京、西を西京

当初は平安京を長安とよんだり、洛陽とよんだりしていた。

岸説によれば應和３年（963）のころ左京は洛陽、右京は長安が具体化してくる。

（9）慶滋保胤『池亭記』

予二十余年以来、歴見東西二京、西京人家漸稀、殆幾三幽墟一矣、人者有レ去無レ来、屋者有レ壊無レ造、其無レ処二移徙一、無レ憚三賤貧一者是居、或楽三幽隠亡命一、当三入レ山帰レ田者不レ去、若下自蓄三財貨一有レ心二弁営一者、雖三一日一不レ得レ住レ之、……夫如レ此者、天之亡二西京一、非二人之罪一明也、

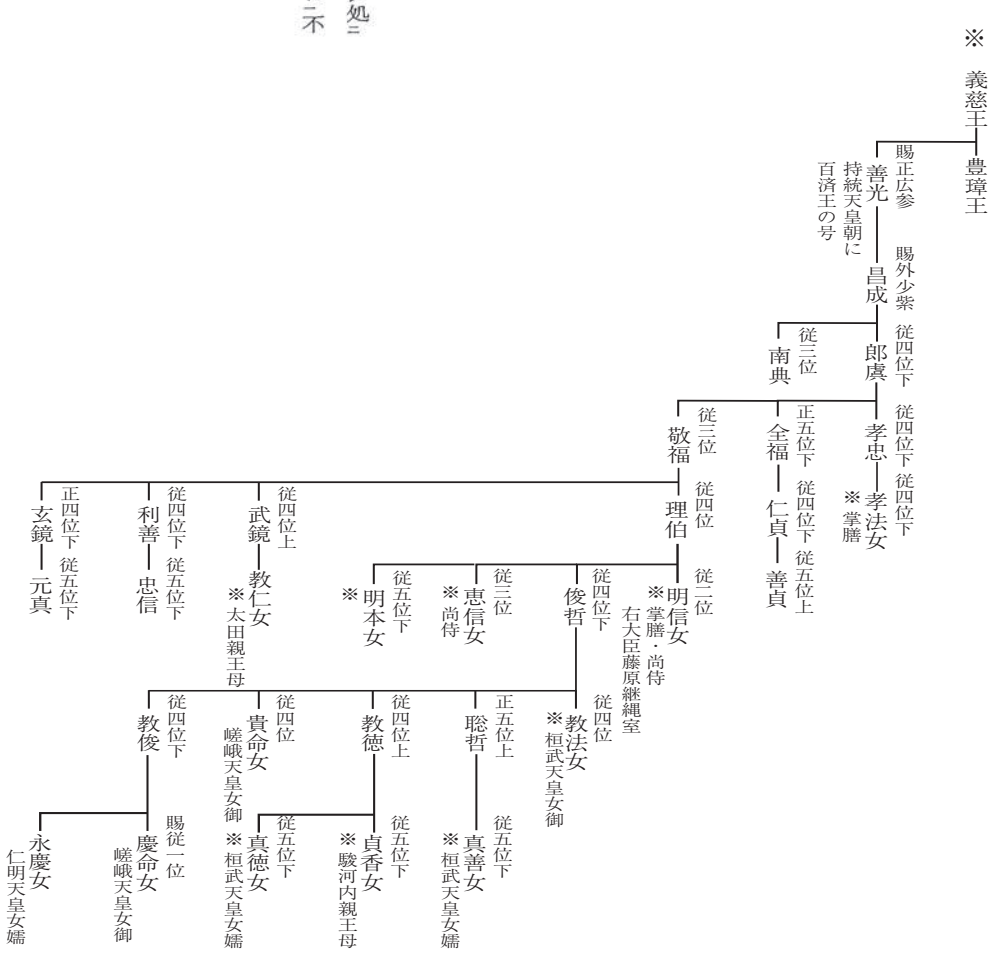
（10）「類聚国史」弘仁十四年（８２３）十月の条

東京・西京

※※※各坊に坊門。長岡京・平安京では朱雀大路に通ずる所のみ、羅城を欠く。

都城というべきでなく宮都というべきではない。

（11）「源氏物語」（乙女の巻）「大和魂」



遣唐使“廃止”後の京都と東アジア―平安王朝の背後世界―

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事　井上満郎

『源氏物語』少女

たはぶれ遊びを好みて、心のまゝなる官爵にのぼりぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつゝ、追従し、けしきとりつゝ従ふほどは、をのづから人とおぼえてやむごとなきやうなれど、時移り、さるべき人にたちをくれて、世衰ふる末には、人に軽め侮らるゝに、とるところなきことになむ侍。なを、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるゝ方も強う侍らめ。さし当たりては心もとなきやうに侍れども、つゐの世の重しとなるべき心をきてをならひなば、侍らずなりなむのちもうしろやすかるべきによりなむ。

二 時の権勢におもねる世間の人々が、内心、せせら笑っては。「鼻まじろき」は鼻であしらう意。三（表面では）追従し、機嫌をとりとり従っているうちは、なんとなく一人前の人物に思われて、この上なくたいしたもののようだが。四しかるべく頼りに思う人に先立たれて。親や兄など、後見となるべき身内の権勢家をさす。五しっかりしたところのないことに。青表紙他本多く「かゝりところなき」。六やはり、学問をもとしてこそ、実務の力量が世間に用いられるとも強うございましょう。「才」は漢学、「大和魂」はわが国の実情に応ずる才覚。漢学で得た儒教的原理をいかに国情の実際に応用するかが、律令官人の理念である。七将来の国家の柱石。源氏は、夕霧が自分とは違って皇統と縁遠いので、政（まつりごと）の補佐役としての朝廷の重鎮にしようとする。八自分（源氏）が亡くなった後も。

『大鏡』巻二

あさましき悪事を申をこなひたまへりし罪により、このおとゞの御末はおはせぬなり。さるは、やまとだましひなどはいみじくおはしましたるものを。

一 あきれるような悪事。道真を讒言したこと。二大和魂。事を処理する知恵・才幹。学才を漢才（からざえ）といったのに対する語。三帝に奏上して行われた罪のために。

『大鏡』巻四

かのくにゝおはしましゝほど、刀夷國のもの、にはかにこの國をうちとらんとやおもひけん、こえきたりけるに、筑紫にはかねて用意もなく、大貳殿ゆみやのもとするゑもしりたまはねば、いかゞとおぼしけれど、やまとごゝろかしこくおはする人にて、筑後・肥前・肥後九國の人をおこしたまふをばさることにて、府の内につかうまつる人をさへをしこりてたゝかはせ給ければ、かやつがかたのものどもいとおほくしにけるは。

一 刀伊国ともいう。「とい」は朝鮮語で、夷狄（えびす）野蛮人の意。沿海州・黒竜江地方にいた女真（じょしん）人。二「こえきたりけるに」に続く。三前もって。四どうしようかと。五大宰府の文官に到るまで。六一団となって戦わせたので。七知恵才幹。八ふるい起こしなさることはもちろんのことで。九興。一〇刀夷国を指す。

『源氏物語』桐壺

そのころ高麗人のまいれるなかに、かしこき相人有けるを聞こしめして、宮の中に召さんことは宇多のみかどの御誡あれば、いみじう忍びてこの御子を鴻臚くはんに遣はしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人おどろきてあまたたび傾きあやしぶ。「国の祖と成て、帝王の上なき位に上るべき相をはします人の、そなたにて見れば乱れ憂ふることやあらむ。おほやけのかためと成て、天下をたすくる方にて見れば、又その相たがふべし」と言。弁もいと才かしこき博士にて、言ひかはしたることどもなむいとけうありける。

二六 高麗（こま）は高句麗国をさし、そののちの渤海（ぼっかい）国・高麗国をもそのように称した。ここは渤海国使の入朝の史実を物語のなかに反映させるか。「故院（桐壺院）の御世のはじめつ方、高麗人のたてまつれりける綾、緋金錦（ひぎん）どもなど」（『梅枝』）とのちにある。うつほには「高麗人も来年は来べき程なるを」（蔵開上）など見える。二七 すぐれた占者。「相人」は相（そう）る人、の意。

15 予言の謎、若宮源氏に

一 史実の宇多天皇の御遺誡を持ち出して、あたかも外国人の宮中での謁見がいけないことであるかのように読者に思わせる。実際の寛平御遺誡は、外蕃の人の必ず召見すべき者は、簾中に在って見るべきで直対してはならない、とある。二 鴻臚館。外国人が来朝する際に接待し宿泊させる設備。三 太政官の右弁局の長官、学者が就任する。四 高麗国人が弱冠の橘清友を見ておどろき未来を占ったという史実がある（文徳実録一）。聖徳太子（伝暦）や光孝天皇（三代実録四十五）についても同じような説話が残り、特に後者は藤原沢子の子で、天位に登ることを渤海国の大使が言い当てている。五 一国の始祖。新しい王朝を開き帝となる人。のちには「かならず世中保つべき相ある人なり」（賢木）。六 帝王の相があるとして将来を占い見ると、治世乱れ憂慮する事態が起きていよう。七 朝廷の柱石。大臣や摂政関白をさす。八 その予想もまた違っていよう。臣下に終ることはあるまいとの相見である。九 興。

みかど、かしこき御心に、大和相を仰せて覚し寄りにける筋なれば、いままでこの君を御子にもなさせ給はざりけるを、相人はまことにかしこかりけりと

おぼして、無品の親王の外戚の寄せなきにてはたゞよはさじ、我御世もいと定めなきを、たゞ人にておほやけの御後見をするなむ行先も頼もしげなめると、とおぼし定めて、いよ〳〵道〳〵の才を習はせ給ふ。

『菅家文草』巻九

請令諸公卿議定遣唐使進止状

右臣某謹案、在唐僧中瓘、去年三月、附商客王訥等、所到之録記、大唐凋弊載之具矣、更告不朝之問、終停入唐之人、中瓘雖區々之旅僧、爲聖朝盡其誠、代馬越鳥、豈非習性、臣等伏檢舊記、度々使等、或有渡海不堪命者、或有遭賊遂亡身者、唯未見至唐、有難阻飢寒之悲、如中瓘所申報、未然之事、推而可知、臣等伏願、以中瓘録記之状、遍下公卿博士、詳被定其可否、國之大事、不獨爲身、且陳款誠、伏請處分、謹言、

寛平六年九月十四日　大使參議勘解由長官從四位下兼守左大辨行式部權大輔春宮學士朝臣某

『長秋記』長承二年八月条（一一三三）

十三日乙未　晴陰不定也、早朝帥中納言送書云、大切可示合事出來、可來向、盤車可下也者、仍午時許行向、云、鎮西唐人船來着、府官等任例存問、隨出和市物畢、其後備前守忠盛朝臣自成下文、號院宣、宋人罰新船、爲神崎御庄領不可經問官之由、所下知也、此事極無面目、欲訟中院也、

『養老令』「関市令」官司条

凡そ官司交易せざる前に、私、諸蕃と共に交易すること得じ。人の為に糺し獲られたらば、其の物を二分にして、一分は糺さむ人に賞へ。一分は没官せよ。若し官司其の所部にして捉へ獲たらば、皆没官せよ。

糺獲―糺告して品物を押えること。
没官―没収して官物とすること。
若官司―官司は交易が行われた当所の官司。関司・津司・里長・坊長をも含む。

『類聚三代格』　天長八年九月（八三一）太政官符

應檢領新羅人交關物事

右被大納言正三位兼行左近衛大將民部卿清原眞人夏野宣�奉勅、如聞、愚闇人民傾覆樞運、踊貴鬻買、物是非可、稽遁弊則家資殆盡、況外土之聲聞、蔑境内之貴物、是實不加捉罰、致之弊、宜下知太宰府、嚴施禁制、勿令輙市、商人來着、船上雜物一色已上、簡定適用之物、附驛進上、不適之色、府官檢察、遍令交易、其直貴賤、一依估價、若有違犯者、殊處重科、莫從寛典、

天長八年九月七日

『平家物語』巻一

日本秋津島は、纔に六十六箇国、平家知行の国卅余箇国、既に半国に超えたり。其外庄園・田畠いくらといふ数を知らず。綺羅充満して、堂上花の如し。軒騎群集して、門前市をなす。揚州の金・荆州の珠・呉郡の綾・蜀江の錦、七珍万宝一として闕たる事なし。歌堂舞閣の基、魚竜爵馬の翫もの、恐くは帝闕も仙洞も、是には過ぎじとぞ見えし。

一　日本式の観相を言いつけて。「その道ならぬ大和相をおほせて」（夜の寝覚五）。二　すでにお考えつきになってしまってある方面のことなので、今日に至るまでこの君を親王に。「君」でなく「宮」とありたい。三　品位（ほん）のない親王が、外戚（母方の親戚）の後援はない、そんな状態のままで頼りない生活をさせまい。四　わたしのご治世にしても。ここの「御」は帝への敬意が心中思惟文であるのに出てくる例。五　予言は朝廷に仕える一臣下の身として終らないらしい将来を暗示しているから、まず朝廷への道を若宮に歩ませる、という長編的構想である。六　政道に関する各方面の学問を習わせなさる。明融本「ならはさせ」。

一　以下、中国産の貴重品を列挙。「揚州」「呉郡」は揚子江の下流、江蘇・浙江地方。「荆州」は中流の湖南・湖北地方。「蜀江」は上流の四川地方。

『小右記』長元二年七月条（一〇二九）

十一日、戊辰、昨夕前大貳惟憲妻入京、即參內云々、惟憲明後日入洛、隨身珎寶不知其數云々、九國（筑紫）推恵獻白鹿都（藤原）二嶋物掃底奪取、唐物又同、已似忘耻、

『百錬抄』永承二年十二月条（一〇四七）

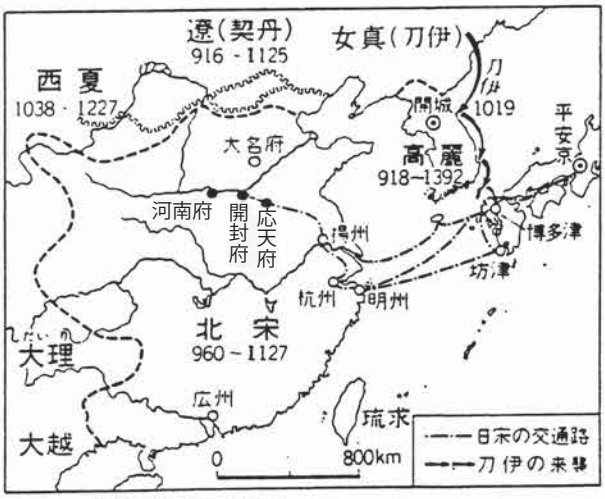
○十二月廿四日、渡唐者清原守武配流佐渡國、同類五人可令徒年之由被宣下、件守武、大宰府召進之、於貨物者納官厨家、

『新猿楽記』

八郎真人は、商人の主領なり。利を重くして妻子を知らず。身を念ひて他人を顧みず。一を持て万と成し、壌を搏ちて金と成す。言をもて他の心を誑し、謀をもて人の目を抜く一物なり。東は浮囚の地に臻り、西は貴賀が嶋に渡る。交易の物、売買の種、称げて数ふべからず。唐物には、沈・麝香・衣比・丁子・甘松・薫陸・青木・竜脳・牛頭・雞舌・白檀・赤木・紫檀・蘇芳・陶砂・紅雪・紫雲・金益丹・銀益丹・紫金膏・巴豆・雄黄・可梨勒・檳榔子・銅黄・緑青・燕脂・空青・丹・朱砂・胡粉・豹虎皮・藤茶埡・籠子・犀生角・水牛如意・瑪瑙帯・瑠璃壺・綾・錦・羅・穀・呉竹・甘竹・吹玉等なり。本朝の物には、緋襟・象眼・纈繝・高麗軟錦・東京錦・浮線綾・金・銀・阿古夜玉・夜久貝・水精・虎珀・水銀・流黄・白鑞・銅・鉄・縑・蟬羽・絹・布・糸・綿・纈纈・紺布・紅・紫・茜・鷲羽・色革等なり。もしくは泊浦にて年月を送り定まれる宿なし。もしくは村邑にて日夜を過し住る所なし。財宝を波濤の上に貯へ、浮沈を風の前に任せたり。運命を街衢の間に交へ、死生を路頭に懸けたり。賓客の清談は甚だ繁くして、妻子の対面はすでに稀なり。

浮囚の地　蝦夷地方、今の東北地方。金ともいう。往古は薩摩国の管内、当時日本の最南端の島。どの島を指すかは未詳。

貴賀が嶋　九州南端の島。鬼界島・鬼島



10～11世紀の東アジア

『令集解』「公式令」詔書式条古記

明神御宇日本天皇詔旨。古記云、御宇日本天皇詔旨、對隣國及蕃國而詔之辭。問、隣國與蕃國何其別。答、隣國者大唐、蕃國者新羅也。

『小右記』長徳三年六月条（九九七）

十三日、乙巳、

下賜右大臣大宰府解文、高麗國牒三通、一枚牒（日本國）、同枚（駅）、高麗可遣返牒否定事、（9張）牒對馬嶋司、一枚同嶋、諸卿相共定申、大略不可遣返牒、又警固要害、兼致內外祈禱事、又高麗牒狀有令記（駅）日本國之文、須給官符（符）大宰、其官符文注高麗爲日本所稱之由、又可令（マヽ）事者、高麗國背礼儀事也、商客歸去之時有披露彼國欤、但見件牒、不似高麗國牒、是若大宋國謀略欤、抑高麗使大宰人也、若不可返遣、可被勘其罪、大宰申請四ヶ條、九國戎兵具皆悉無實、可令國司修補事、

八

『高麗史』

〔家001〕穆宗二年（九九九）　〔十月〕日本国人の道要弥刀等二十戸、来投す。之を利川郡に処らしめ、編戸と為す。

〔家002〕顕宗三年（一〇一二）　〔八月〕戊戌（三日）、日本国の潘多等三十五人、来投す。

『扶桑略記』延長八年四月条（九三〇）

延長八年庚寅四月朔日。唐客稱東丹國使。著丹後國。令問子細。件使。荅狀前後相違。重令復問東丹使人等。本雖爲渤海人。今降爲東丹之臣。而對荅中。多稱契丹王之罪惡云々。一日爲人臣者。豈其如此乎。須舉此旨。先令責問。今須令進過狀。仰下丹後國已了。東丹國失礼義。

『宋史』日本伝（夷蛮伝）

太宗、裔然を召見し、これを存撫すること甚だ厚く、紫衣を賜い、太平興国寺に館せしむ。上、その国王は一姓継を伝え、臣下も皆官を世々にするを聞き、因って歎息して宰相にいっていわく、「これ島夷のみ。乃ち世祚遐久にして、その臣もまた継襲して絶えず。これけだし古の道なり。中国は唐季の乱より寓県分裂し、梁・周の五代(1)、歴を享くること尤も促く、大臣の世胄、能く嗣続すること鮮なし。朕、徳は往聖に慙ずといえども、常に夙夜寅しみ畏れ、治本を講求し、敢て暇逸せず。無窮の業を建て、可久の範を垂れ、また以て子孫の計をなし、大臣の後をして世々禄位を襲わしむるは、これ朕の心なり」と。

（1）中国の異称。宇県ともかく。宇は宇宙、県は赤県神州の意。

（2）後梁（九〇七―二三）・後唐（九二三―三六）・後晋（九三六―四六）・後漢（九四七―五〇）・後周（九五一―五九）の五王朝。わが醍醐天皇の延喜七年から村上天皇の天徳三年までに当たる。

その国多く中国の典籍あり。裔然の来るや、復た孝経一巻・越王の孝経新義第十五の一巻を得たり。皆、金縷紅羅褾、水晶もて軸となす。『孝経』は即ち鄭氏(1)の注せる者、越王とは乃ち唐の太宗の子越王貞(2)、新義とは記室参軍任希古(3)等の撰なり。裔然、復た五台(4)に詣らんことを求む。これを許し、過ぐる所をして食を続がしむ。また印本大蔵経を求む、詔してまたこれを給す。

（1）後漢の鄭玄（一二七―二〇〇）のこと。

（2）太宗（六二七―四九）は唐の第二代の天子。その子越王貞の伝は『旧唐書』巻七六にある。

（3）章表その他書記のことを掌る官。後漢大尉官庁に記室令史あり、秩百石であった。のち記室史・記室参軍あり、元以後廃された。

恵心僧都源信書状（『往生要集』所収）

仏子源信、暫く本山を離れ、西海道の諸州、名嶽・霊窟に頭陀せるに、たまたま遠客著岸の日、図らざるに会面せり。これ宿因なり。しかれどもなほ方語、いまだ通ぜず。帰朝おのおの促し、更に手札に封じて、述ぶるに心懐を以てす。

側かに聞く、法公の本朝には三宝興隆すと。甚だ随喜す。わが国に東流の教も、仏日再び中る。当今、極楽界を剋念し、法華経に帰依する者、熾盛なり。仏子はこれ極楽を念ずるその一なり。本習深きを以ての故に、往生要集三巻を著して、観念に備へたり。それ一天の下、一法の中、皆四部の衆なり。いづれか親しく、いづれか疎からん。故にこの文を以て、あへて帰帆に附す。そもそも、本朝にありてもなほその拙きを慙づ。いはんや他郷に於てをや。しかれども、本より一願を発せしことなれば、たとひ誹謗の者ありとも、たとひ讃歎する者ありとも、併に我と共に往生極楽の縁を結ばん。また先師故慈恵大僧正（諱良源）観音讃を作り、著作郎慶保胤、十六相讃及び日本往生伝を作り、前の進士為憲、法華経賦を（作れり）。同じくまた贈りて、異域の、この志あるものに知らしめんと欲す。

ああ、一生は苒々たり。両岸蒼々たり。後会いかん。泣血するのみ。不宣以状。

正月十五日　　天台楞厳院某申状

大宋国某賓旅下

宋人周文徳書状（『往生要集』所収）

返　報

大宋国台州の弟子周文徳、謹んで啓す。

仲春漸く暖かにして、和風霞散す。伏して惟みれば、法位動きなく、尊体泰きことありや。不審し不審し。悚恐る悚恐る。ただ文徳、入朝の初、まづ方に向ひて禅室に礼拝せり。旧冬の内、便信を喜びて委曲を啓上せり。則ち大府の貫主、豊嶋の才人に書状一封を附して奉上つること先に畢んぬ。計みるに、披覧を経つらんか。欝望の情、朝夕休まず。馳憤の際に便脚に遇ひて、重ねて啓達す。ただ大師撰択の往生要集三巻は、捧持して天台の国清寺に詣り、附入すること既に畢んぬ。則ちその専当の僧、領状を予に請

仏子…　仏弟子。釈子（しゃし）に同じ。

以下の文は、宋人、周文徳に与えた手紙。ここには、この書を宋に送ることが記されているので、このとき送られたものを遺宋本という。

西海道　いまの九州地方。

方語　方言。くになまり。

手札に…　手紙に書きつけて、心に思うことを述べることにしました。

法公の本朝　あなたの本国。当時、太祖によって統一を見た北宋は、そのあとを継いだ太宗（九六—九七）によって、完全な南北統一の国家に発展し、仏教も外護を受けて隆盛に向かっていた。天台宗は暗黒時代を脱して、義寂の門に義通、義通に遵式・知礼などを出し、ほかに悟恩・源清・智円も出、いわゆる山家山外（さんげ）の活潑な論争を展開する。

故慈恵大僧正　源信の師、良源は永観三年（九八五）正月三日入寂したが、慈恵の称は諡号で、寛和三年（九八七）二月十六日の勅によって、故大僧正良源に追諡されたもの。これよりこの手紙は永延二年（九八八）以後とされる。

観音讃　現存しない。

台州　浙江省臨海県にある。

不審…　近況がわからないので、心配です。

大府…　大府は中国の官庁名。日本では大蔵省。人物については不明。

国清寺　天台山国清寺は天台宗の根本道場。最澄・義真・円仁・円載・円珍・成尋・俊芿（しゅん）など、みなここを訪ねている。

専当の…　掛りの僧が受領の書状を渡してくれました。

著作郎慶保胤　著作郎は中国の官名、日本では内記。慶滋保胤は大内記の職にあった。十六相讃は現存する。

進士為憲　進士は日本では文章生（もんじょう）のこと。源為憲（一一〇二）は文章生の後、蔵人をへて、のち国司を歴任した。法華経賦は現存しない。

一生は…　一生は過ぎやすく、二人とももう年をとっています。いつの日また会えるか、別れを悲しむばかりです。十分意を尽くしません。謹言。

けたり。ここに緇素随喜し、貴賤帰依して、結縁の男女、弟子伍佰余人、おのおの虔心を発し、浄財を投捨し、国清寺に施入して、忽ちに五十間の廊屋を飾り造れり。柱壁を彩画し、内外を荘厳し、供養し礼拝し、瞻仰し慶讃せり。仏日、光を重ね、法燈、朗かなるを盛にす。興隆仏法の洪基、往生極楽の因縁、ただここにあり。

*方今、文徳、忝く衰弊の時に遇へども、衣食を取るの難を免れたり。帝皇の恩沢を仰ぎ、いまだ詔勅を隔てず。*并日の食、甑を重ねて塵を積まんとするも、なんぞ飢饉の惑を避けんや。伏して乞ふ、大師、*照鑑を垂れよ。弟子、憤念の至りに勝へず。敬みて*礼代の状を表す。不宣謹言。

二月十一日　　大宋国弟子周文徳申状

謹上　天台楞厳院源信大師禅室　法座前

方今…　ただいま、わたしは困窮の時に遭遇しています。

并日の食…　一日の食物をくいのばし、甑(こし)は重ねたまま、塵を積むような苦しい生活に耐えていますが。

照鑑を…　どうか、ご照覧ください。わたしはこの苦しみの思いをどうすることもできません。

礼代の状　お礼の手紙をさしあげます。

僧成尋申状　延久二年正月（一〇七〇）

聖人申渡唐

阿闍梨傳燈大法師位成尋誠惶誠恐謹言

請特蒙　天裁給官符於本府隨大宋國商客歸郷巡禮五臺山并諸聖跡等狀

右成尋伏尋往跡先賢入唐之輩本懐各以相分或爲決法流之奥旨或爲禮聖跡之霊勝互請　天裁於本朝方遂地望於異域　（中略）　望請　天裁給官符於大宰府隨商客皈向之便遂聖跡巡禮之望某誠惶誠恐謹言

延久二年正月十一日　　阿闍梨傳燈大法師位成尋

【基調講演・報告】

やまとごころとからざえ

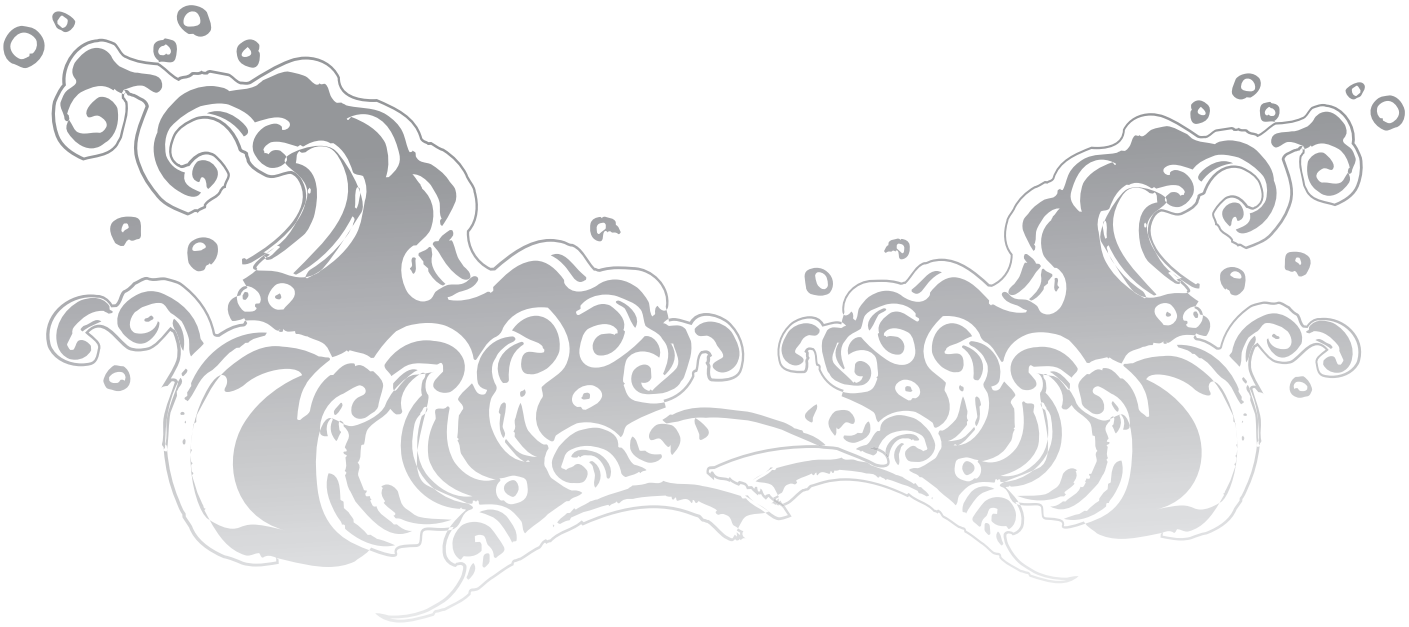
和魂漢才

ー京都・東アジア交流の考古学ー

【基調講演】
飛鳥・奈良時代における東アジアの影響－仏教文化を中心に－
京都府立大学教授　菱田哲郎　Ｐ１～Ｐ８

【基調報告】
考古資料からみた奈良・平安時代における東アジアとの交流
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター主査　筒井崇史　Ｐ９～P14

中世における東アジアとの交流
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター副主査　伊野近富　P15～P20



飛鳥・奈良時代における東アジアの影響
－仏教文化を中心に－

京都府立大学
教授　菱田哲郎

仏教の導入に代表されるように、飛鳥時代には東アジアからの新しい知識や技術がもたらされ、列島の文明化が大きく進展した。京都においても、この新しい動きを物語る遺跡が多くあり、飛鳥時代における先進地の一つとなっている。その背景には、5世紀以来、定着しつつあった渡来人の存在があり、秦氏のみならず高句麗系の諸氏族の果たした役割は大きかったと推測できる。つまり、飛鳥・奈良時代の文明化の基礎が、すでに古墳時代から用意されていたとも言えよう。寺院や瓦といった資料から、その背景にある東アジアとの関係を読み解き、新たな文化を受容できた背景を検討することにしたい。

Ⅰ　伽藍誕生と東アジア

飛鳥寺の建設　　百済系の僧侶と技術者　　『元興寺縁起并流記資財帳』の塔露盤（ろばん）銘
　東漢（やまとのあや）氏が率いる4部の手人たち　　定着した渡来人の参画
山背国葛野郡の古代寺院　　葛野寺（かどのでら）と広隆寺　　嵯峨野の前方後円墳　秦氏の墓域
　「葛野秦寺」　　北野廃寺＝平安時代の野寺　　葛野郡の葛野寺
7世紀前半では大和・河内の限られた場所で寺院の造営　　山背国の先進性

Ⅱ　隼上り瓦窯と宇治橋

隼上り（はやあがり）瓦窯　　飛鳥の豊浦（とゆら）寺の造営と所用瓦の生産　　4基の窯　　620～630年代
　百済系と高句麗系の瓦　　「高句麗」系の謎　　百済経由？新羅経由？
　池山瓦窯の存在　　「高句麗系」瓦の誕生に宇治地域が重要な役割
宇治橋と宇治橋碑　　大化2（646）年に道登により架橋
　『日本霊異記』の道登　　高麗学生とは　　高句麗使節のルートと宇治
　山尻（背）の恵満の家の出自　　宇治架橋の必然性

Ⅲ　南山城の高句麗系渡来人

南山城の渡来系文物　　森垣外遺跡　　天竺堂１号墳　　上狛と下狛　　高麗寺

黄文連（きぶみのむらじ）と平川廃寺　　華麗な周縁文様をもつ奈良時代の瓦（Ｆ型式）

　　黄文連の一族　　壬申乱頃から活躍　　東大寺の画工　　黄文連本実と仏足石

久世郡の豪族　　黄文連＝奈良時代に台頭

　　栗隅（くりくま）（前）氏＝７世紀後半に王家との関係を構築

　　山背忌寸（やましろのいみき）　　山代国造の系譜　　道登の出自の「山背」はこの山背忌寸？

久世郡の古代寺院　　正道（しょうどう）廃寺　　久世廃寺　　平川廃寺

・高い文化をもった渡来系氏族　　故地との関係を保持　　新たな技術や知識の摂取

・百済や高句麗の滅亡後の遺民　　高い技術と知識を保持して渡来人社会に溶け込む

・渡来系氏族を窓口に近辺の氏族も留学生を送り出せたのでは？

【関連年表】

西暦	和暦	月	記事
588	崇峻元		法興寺（飛鳥寺）造営着手。
596	推古４	11	法興寺（飛鳥寺）完成。蘇我馬子の子善徳を寺司とする。 高句麗僧慧慈・百済僧慧聡が法興寺に住む。
623	推古 31	7	新羅・任那の使節が来朝。仏像等を献上。
645	大化元	6	蘇我本宗家滅亡（乙巳の変）。
		8	十師を定め、恵妙を百済寺の寺主とする。 国造・伴造の造寺を奨励する。
646	大化２		道登が宇治橋を架橋する。
663	天智２	8	白村江の海戦で唐・新羅に敗北。
665	天智４	2	百済遺民四百余人を近江国神前郡に置く。
666	天智５	冬	百済遺民二千余人を東国に遷す。
668	天智７	7	高句麗の使節が越路を経由して来朝する。
669	天智８		百済遺民七百人を近江国蒲生郡に遷す。
685	天武 14	3	諸国の家ごとに仏舎を作り、仏像・経を置いて礼拝させる。
692	持統６		寺院の数 545 ヶ寺（『扶桑略記』）
710	和銅３	3	平城京に遷都。
716	霊亀２	5	寺院の荒廃を防ぐために数寺を合併させる。 諸国の寺家について財物・田園などを検校させる。
728	神亀５	12	金光明経 (最勝王経）を諸国に 10 巻ずつ頒下する。
735	天平７	6	寺院の併合をやめさせる。
737	天平９	3	諸国に釈迦仏像・挟侍菩薩を造らせ、大般若経を写させる。
738	天平 10	4	京・畿内・七道諸国で最勝王経を転読させる。
740	天平 12	6	国ごとに法華経 10 部を写し、七重塔を建てさせる。
741	天平 13	2	国分寺建立の詔。

【参考文献】

井上満郎「古代南山城と渡来人―馬場南遺跡文化の前提―」『京都府埋蔵文化財論集　第６集』、2010 年、同センター
上原真人「初期瓦生産と屯倉制」『京都大学文学部研究紀要』42、2003 年
清水昭博『古代日韓造瓦技術の交流史』、2012 年、清文堂
杉本宏「隼上り瓦窯跡発掘 25 年目の検証」『考古学論究』、2007 年、小笠原好彦先生退任記念論文集刊行会
辻本和美「黄文の寺と瓦―平川廃寺軒丸瓦Ｆ型式をめぐって―」『京都府埋蔵文化財論集　第４集』、2001 年、同センター
花谷浩「豊浦寺の高句麗系軒丸瓦」『古代瓦研究　Ⅰ』、2000 年、奈良国立文化財研究所
菱田哲郎『古代日本　国家形成の考古学』、2007 年、京都大学学術出版会
吉田晶「大化前代の南山城―久世郡地域を中心として―」大阪歴史学会編『古代国家の形成と展開』1976 年、吉川弘文館

史料①『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』所引塔露盤銘

（前略）

戊申、始請二百濟王名昌王法師及諸佛等一、改遣二上釋令照律師、惠聰法師、鏤盤師將德自昧淳寺師丈羅未大、文賈古子、瓦師麻那文奴、陽貴文、布陵貴、昔麻帝彌。令二作奉一者、山東漢大費直名麻高垢鬼、名意等加斯費直也。書人百加博士、陽古博士、丙辰年十一月既。爾時、使二レ作金人等一意奴彌首名辰星也、阿沙都麻首名未沙乃也、鞍部首名加羅爾也、山西首名都鬼也。以二四部首一爲レ將、諸手使二作奉一也

第76図　飛鳥寺創建軒丸瓦（星組）
側面観・正面観（奈良国立文化財研究所）
瓦当径15.7㎝　6世紀末～7世紀初

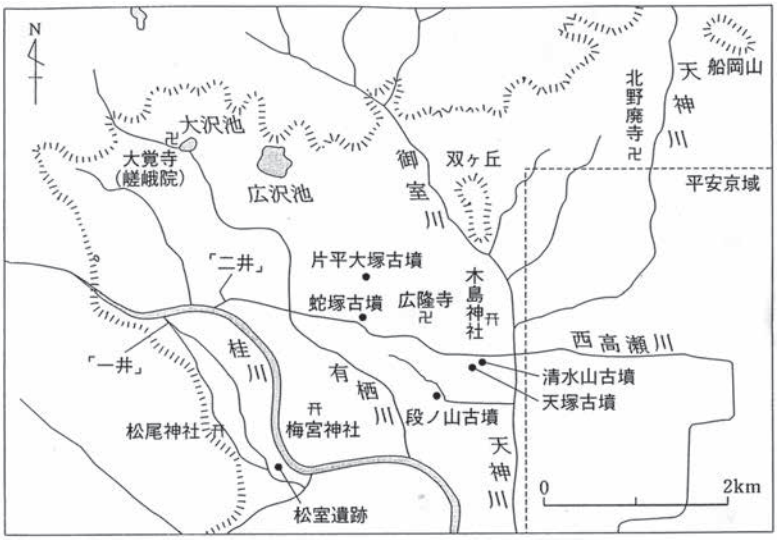
第75図　飛鳥寺創建軒丸瓦（花組）
側面観・正面観（奈良国立文化財研究所）
瓦当径16.2㎝　6世紀末～7世紀初

図①　飛鳥寺創建の二種の軒丸瓦

図③　秦河勝像

北野廃寺瓦窯5（b）　広隆寺1
北野廃寺瓦窯6（b）　広隆寺2
北野廃寺瓦窯7（c）　広隆寺3
北野廃寺瓦窯8（c）　広隆寺4

図②　北野廃寺と広隆寺の瓦



図④　嵯峨野の古墳と遺跡

史料②『日本書紀』

推古天皇十一年（六〇三）十一月朔条

皇太子謂二諸大夫一曰、我有二尊仏像一。誰得二是像一、以恭拝。時秦造河勝進曰、臣拝レ之。便受二仏像一。因以造二蜂岡寺一。

推古天皇三一年（六二三）七月条

新羅遣二大使奈末智洗爾一、任那遣二達率奈末智一、並来朝。仍貢二仏像一具、及金塔并舎利、且大潅頂幡一具、小幡十二条一。即仏像居二於葛野秦寺一。以二余舎利、金塔、潅頂幡等一皆納二于四天王寺一。

付表　広隆寺末寺別院記の寺院

寺名	別名	所在	建立者	建立時期	備考
寮病院	非田院	常葉林	別当増命	延喜二年	広隆寺近傍
尊学院		常葉林			広隆寺近傍
蓮華院		広隆寺東北隅			広隆寺近傍
東陽院	願広寺・優婆塞尼寺		東陽大師	天平宝字二年	広隆寺近傍
安養寺			秦長倉多牟部	推古朝	広隆寺近傍
実相寺			真済僧正		広隆寺近傍
隆城寺	紀伊寺		秦造和賀	孝徳朝	『来由紀』
法相寺		相模国高座郡			隆城寺別院
薬上寺	蟹幡寺	山城国相楽郡	阿津見長者		秦造和賀か
法輪寺	桂井寺		道昌僧都		
願成寺	長岡寺		秦田村之大石波良之遠酒公		
法長寺	深草寺	山城国紀伊郡	秦久丸	和銅二年	乙訓郡か
和泉秦寺	木島寺・薬師寺	和泉国和泉郡	勝賀佐枝等	天智朝	
三昧院		摂津国		天武十年	
河内秦寺	秦興寺・薬師寺				
江林寺	定額寺	丹波国天田郡	秦長全	斉明朝	
枝林寺		丹波国天田郡	秦長全三毛志等		重複か
壱志寺					
滋野院					

図⑤　山背の白鳳寺院

史料③　宇治橋碑

浚浚横流　其疾如箭　修修征人　停騎成市　欲赴重深　人馬亡命（忘）　従古至今　莫知杭竿（筆）
世有釋子　名曰道登　出自山尻　恵滿（慧）之家　大化二年　丙午之歳　構（縫）立此橋　濟度人畜
卽因微善　愛發大願　結因此橋　成果彼岸　法界衆生　普同此願　夢裏空中　導其苦縁（世）
（傍点の文字は原碑文、（　）内は有力な別伝）

宇治橋断碑とその銘文

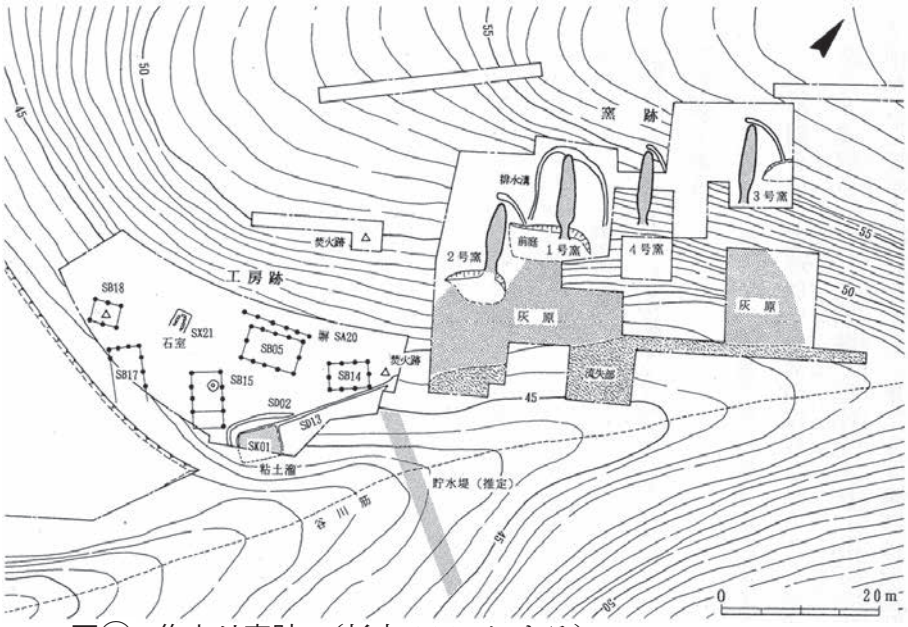
浚浚たる横流　其の疾きこと箭の如し
修修たる征人　騎を停めて市を成す
重深に赴かんとすれば　人馬命を亡なう
古従り今に至るまで　杭竿を知る莫し
世に釋子有り　名を道登と曰う
山尻恵滿之家自り出たり
大化二年　丙午之歳
此の橋を構立し　人畜を濟度す
卽ち微善に因って　愛に大願を發すらく
因を此の橋に結んで　果を彼の岸に成さん
法界の衆生　普く此の願に同じ
夢裏空中に　其の苦縁を導かんことを

古代の郡境と諸郷

図⑥　古代の宇治郡の諸郷　（『宇治市史』に加筆）

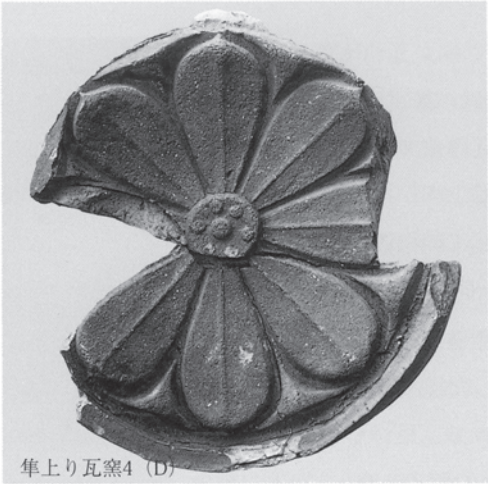
史料④『日本霊異記』上第十二縁

高麗学生道登者、元興寺沙門也。出レ自二山背国恵満家一。大化二年丙午、営二宇治椅一往来之時、髑髏在二于奈良山渓一、為二人畜所一レ履。法師悲レ之、令二従者麻侶一置二之於木上一。…（下略）



図⑦　隼上り窯跡　（杉本 2007 による）

北野廃寺瓦窯7（c）


隼上り瓦窯4（D）

隼上り瓦窯Aの瓦当裏面

隼上り瓦窯1（A）

隼上り瓦窯5（D）

隼上り瓦窯Dの瓦当裏面

楠葉平野山窯３

隼上り瓦窯2（B）

隼上り瓦窯6（E）

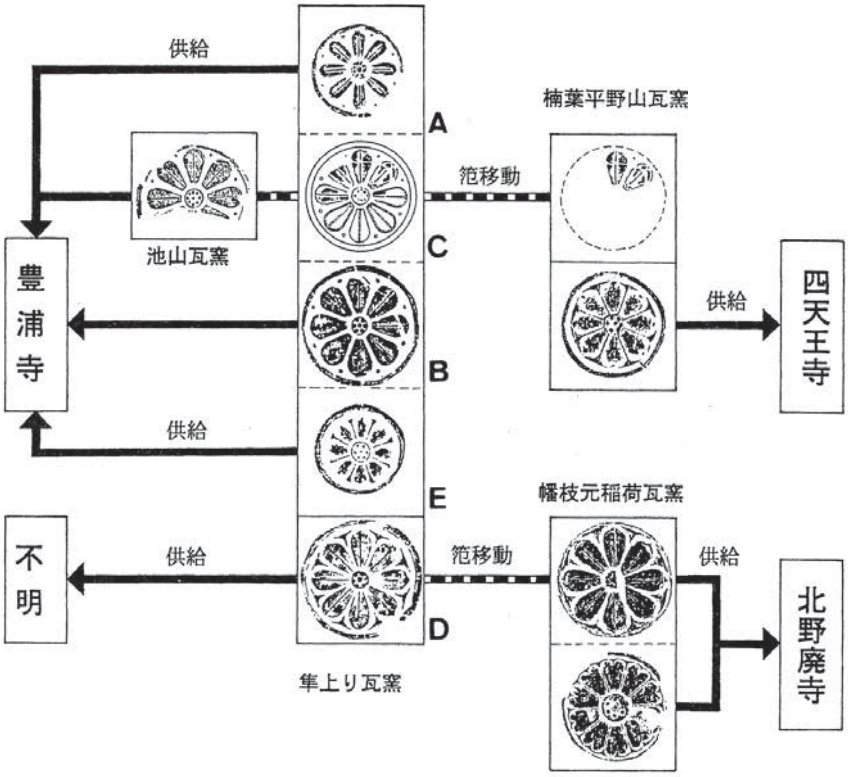
楠葉平野山窯４

隼上り瓦窯3（C）

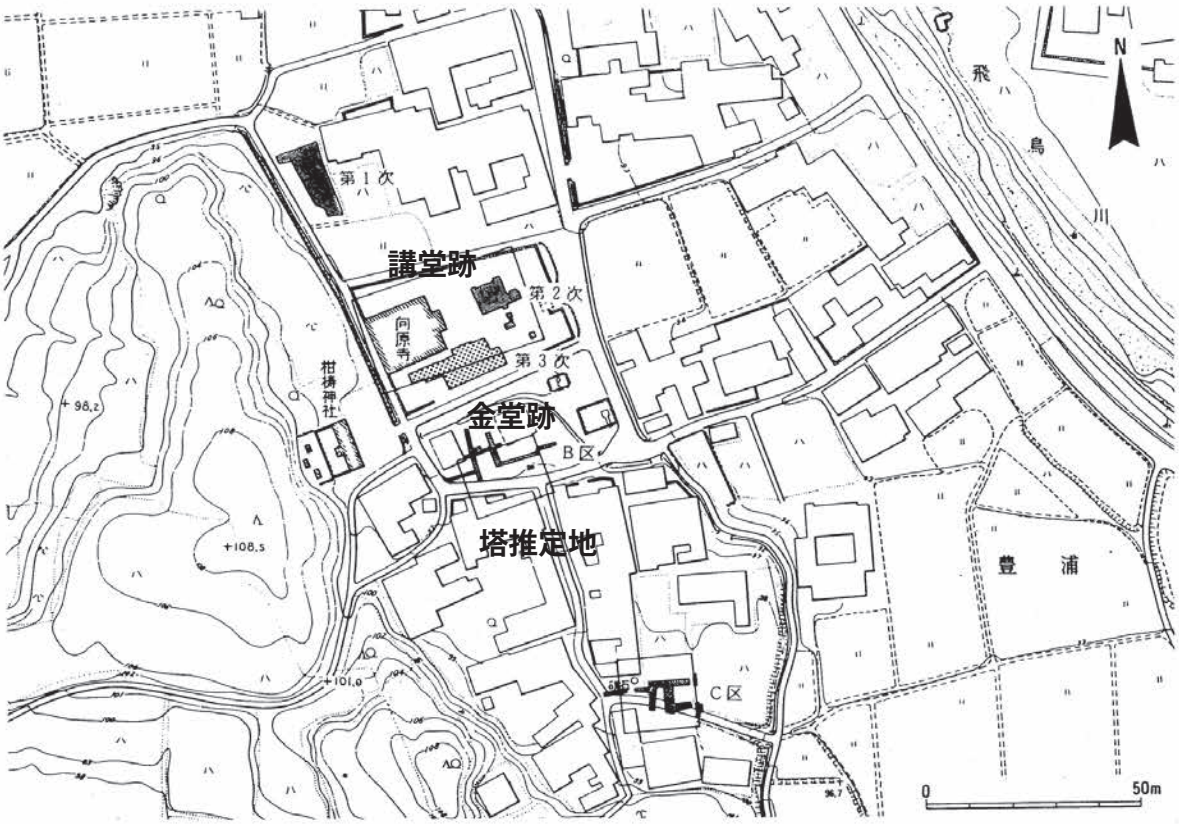
池山瓦窯1（Aa）

楠葉平野山窯５

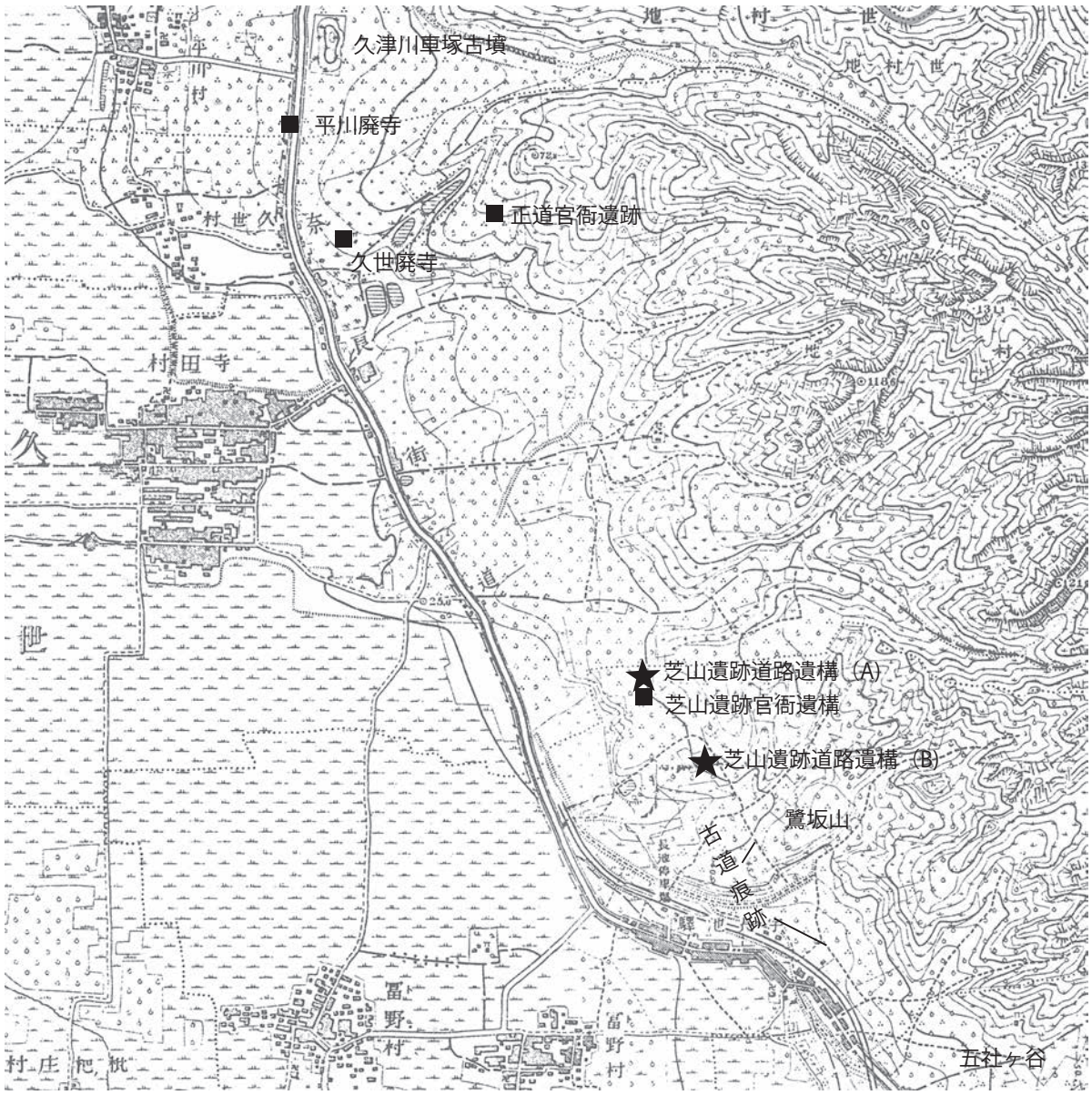
図⑧　隼上り瓦窯出土の軒丸瓦と関連遺跡の軒丸瓦　（拠『蓮華百相』橿原考古学研究所附属博物館）



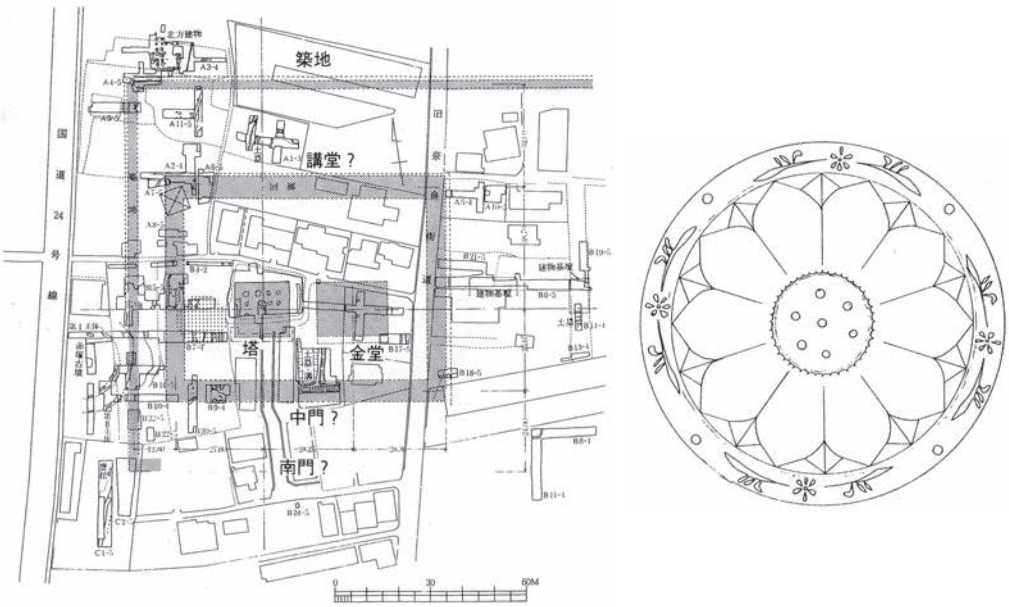
図⑨　隼上り窯跡と供給先　（杉本 2007 による）



図⑩　豊浦寺の伽藍　（花谷 2000 に加筆）



図⑪　古代北陸道と久世郡の寺院



図⑫　平川廃寺の伽藍と軒丸瓦Ｆ型式　（辻本 2001 による）

史料⑤『新撰姓氏録』山城国諸蕃
高麗
黄文連　出レ自二高麗国人久斯祁王一也。

考古資料からみた奈良・平安時代における東アジアとの交流

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
主査　筒井崇史

1．はじめに

「今日の日本の文化はどのように形成されてきたか」ということを考えるとき、飛鳥時代から平安時代にかけての、「古代」という時代の果たした役割はとても大きいものがあります。具体的に言いますと、古墳時代までの文化を基本として、中国や朝鮮半島からさまざまな文物を取り入れ、日本独特の文化を生み出していった時代、ということになります。

古墳時代から飛鳥時代にかけての東アジア世界は激動の時代でした。こうした激動の時代を背景として、日本は高度な知識や技術を吸収しようと、「国家」が率先して、中国や朝鮮半島に使者を派遣し、最新の知識や技術、そして文化を摂取することを目的とした国家間の「交流」を行っていました。

一方、考古学の分野では、遺構や遺物などの研究から文献に記録されていない「交流」も明らかにすることができます。考古学の成果からは、在地の有力者や民間レベルでの「交流」が存在したことも分かります。

今日の報告では、古代の日本文化の形成に大きな影響を与えた東アジア世界との「交流」を、「仏教」・「都城」・「文字」という３つキーワードを取り上げて、みていきたいと思います。

2．仏教の受容と広がり

仏教は、朝鮮半島の百済から伝わりました。

最も古い寺院の１つである木津川市高麗寺が創建されて以降、京都府内では多数の古代寺院が造営されました。こうした古代寺院の伽藍や軒瓦などをみると、百済だけではなく、高句麗や新羅ともさまざまな交流があったことがわかります。

また、美濃山廃寺では、「ひさご形土製品」、「覆鉢形（ふくばちがた）土製品」と呼ぶ一風変わった土製品が出土しています。推測によるところが多いのですが、ほぼ同じころ、新羅でも小さな塔をたくさん造った「造塔供養（小塔供養）」がみられることから、その影響を受けている可能性があります。

８世紀になって仏教が定着してくると、日本固有の信仰であった「神」と「仏」が融合していきます。こうした信仰形態を「神仏習合」といい、仏教が日本的な信仰へと変容していく１つの形です。こうした信仰にもとづく寺院の１つとして木津川市神雄寺跡があります。神雄寺跡では、仏具として使用された奈良三彩の香炉や小壺などが出土しました。奈良三彩は唐三彩を模倣したものですが、金属製容器を模倣するなど、唐三彩にはない形のものが作られました。

３．みやこの造営とくらし

遣唐使など、海外に派遣された使節がもたらしたものの中には、都城制や律令制など、国家を運営していくために必要なさまざまな制度がありました。

都城は、律令国家を視覚的に見せるためのものとして、唐の都長安に倣って整備されました。京都府内には恭仁京・長岡京・平安京の３つが造営されました。

木津川市恭仁宮跡は、聖武天皇が造営した宮で、京域は確認されていません。しかし、恭仁宮跡から少し離れた木津川市上狛北遺跡では、恭仁宮跡と同時期の土器とともに「讃岐国」と書かれた木簡などが見つかっています。こうした木簡は平城京跡などでたくさん出土していますが、律令制がどのように運営されていたかなどを知る上で、非常に重要な資料です。木簡の内容を分析することによって、日本に中国から学んだ諸制度が定着していくようすを明らかにすることができます。

向日市・長岡京市・大山崎町・京都市にまたがる長岡京跡や京都市の平安京跡は、桓武天皇が造営した都城です。長岡京跡左京二条三坊十五町の発掘調査で明らかになった、当時の貴族の邸宅は、正殿を中心に、その両側に脇殿が配置されたもので、平城京跡や平安京跡でも類例が知られています。

平安京跡は、日本では最後となった中国式の都城です。右京三条二坊十六町「斎宮」邸宅跡の調査では、長岡京跡などの邸宅跡とは異なり、園池を中心にその周囲に建物群が広がっているようすが明らかになりました。10 世紀後半ごろのもので、日本風の貴族邸宅の様式とされる「寝殿造」の原型の１つではないかと考えられています。

また、平安宮豊楽殿跡で出土した緑釉軒瓦は、奈良三彩や緑釉陶器の製作で培われた施釉技術をもって作られました。

４．仮名文字の誕生

律令制の導入に伴い、行政機構や地方支配のための制度が整えられました。そして、律令制にもとづくさまざまな文書のやり取りや納税のための付け札の作成などが必要となりました。このように律令制の進展に伴って、文字（漢字）の使用が急速に全国各地に広がっ

ていきました。

一方、文字を使うようになった古代の日本人は、万葉集に代表されるように、心の思いを「和歌」という形で表現しました。こうした和歌を、文字を持たなかった日本人は漢字の音を利用することで、日本語の語順のままに表記することができるようになりました。これが「万葉仮名」です。近年、実際に和歌を書いた木簡が発見されています。神雄寺跡出土の歌木簡はそうした木簡の１つです。

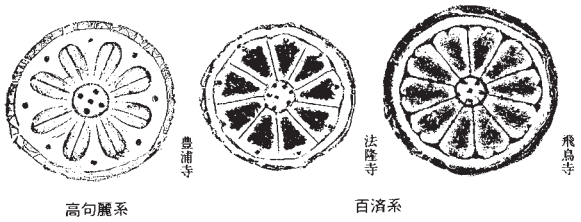
さらに、こうした１字１音を表す漢字をくずしたり、その一部を省略したりして10世紀頃には「ひらがな」や「カタカナ」が誕生します。特に「ひらがな」は和歌に利用されることが多く、平安京跡では木簡以外に土器に和歌や「いろはうた」を書き綴ったものが出土しています。

５.まとめ

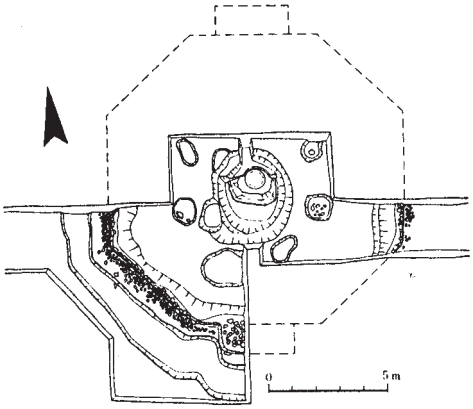
今回の報告では、「仏教」・「都城」・「文字」という３つのキーワードを取り上げて、古代の日本文化の形成には中国や朝鮮半島など、東アジア世界から大きな影響を受けていたことを示しました。しかし、ほかにもたくさんの知識・技術・文物がもたらされたことと思われます。

古代における「交流」の特徴は、物の交流ではなく、仏教や国家運営などといった、知識や技術が中心であったということです。

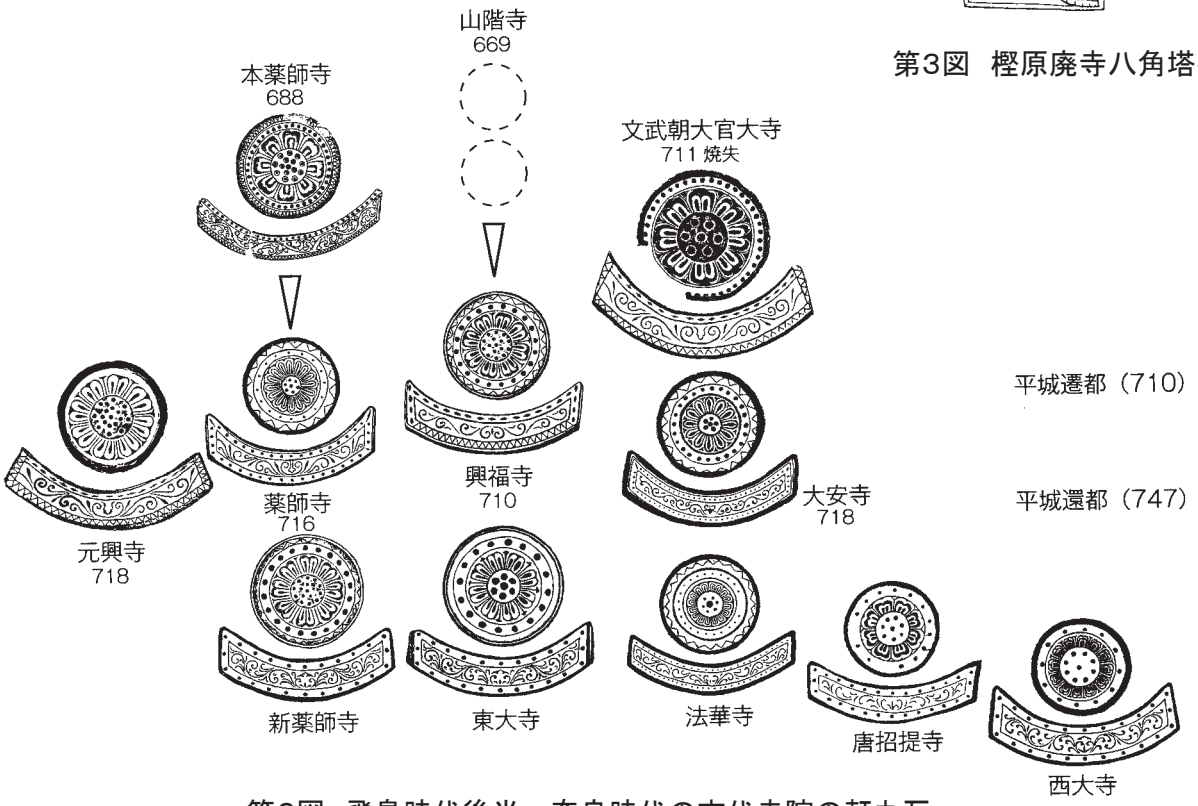
12
仏教の受容と普及



第1図　初期の古代寺院の軒丸瓦

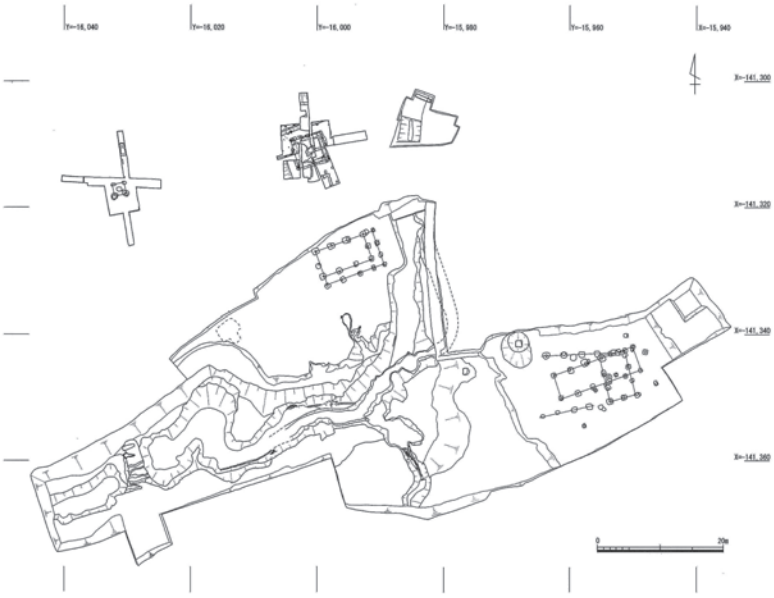


第3図　樫原廃寺八角塔平面図



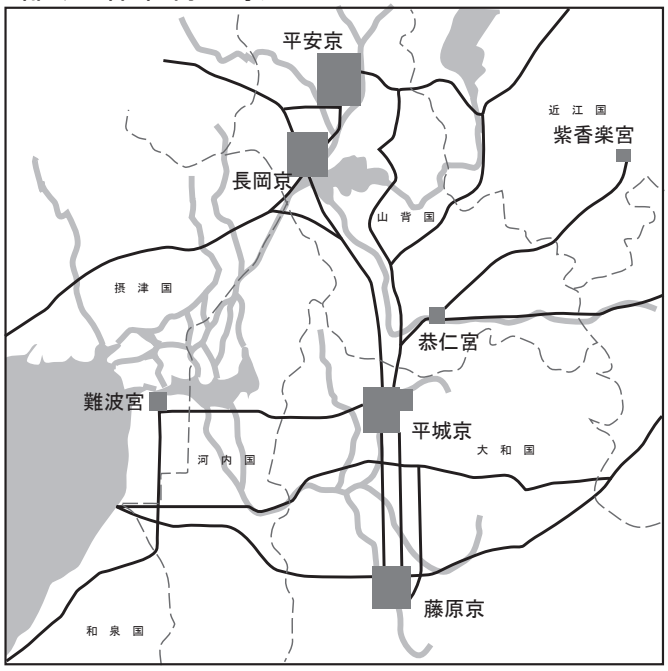
第2図　飛鳥時代後半～奈良時代の古代寺院の軒丸瓦

第4図　美濃山廃寺出土ひさご
形土製品・軒丸瓦

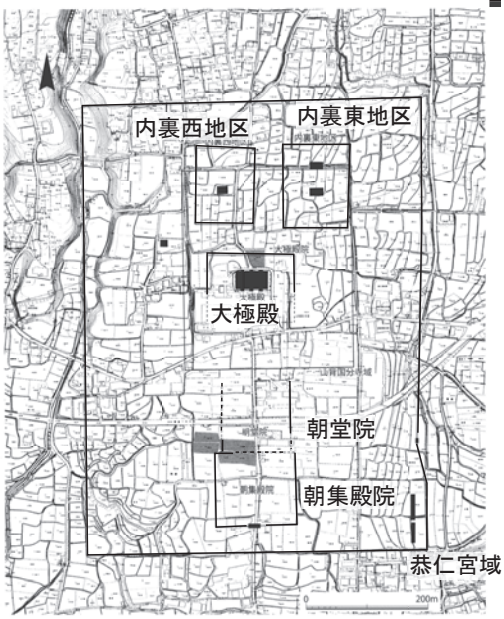


第5図　神雄寺跡遺構配置図

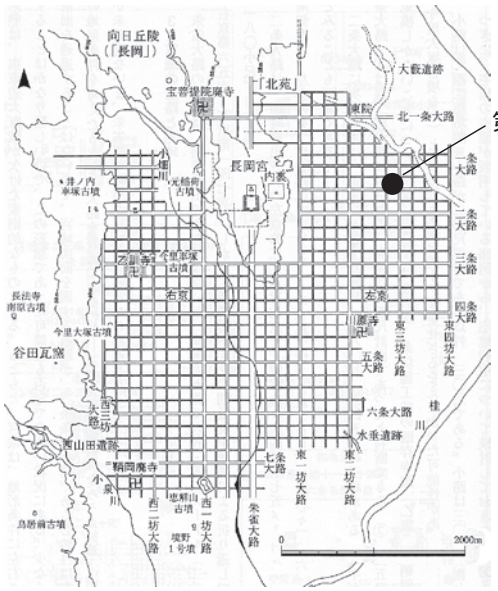
都城と律令制の導入



第6図　都城位置図

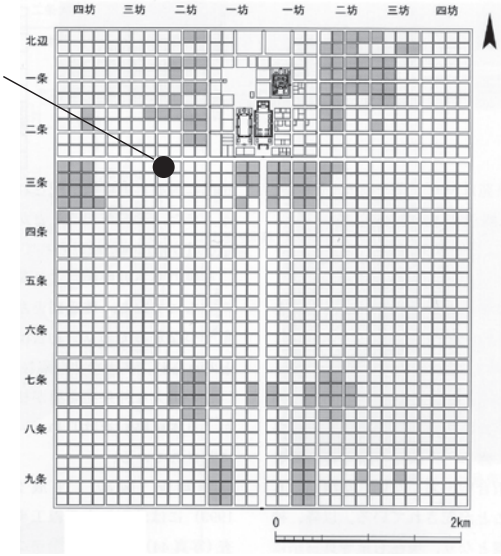


第7図　恭仁宮跡平面図



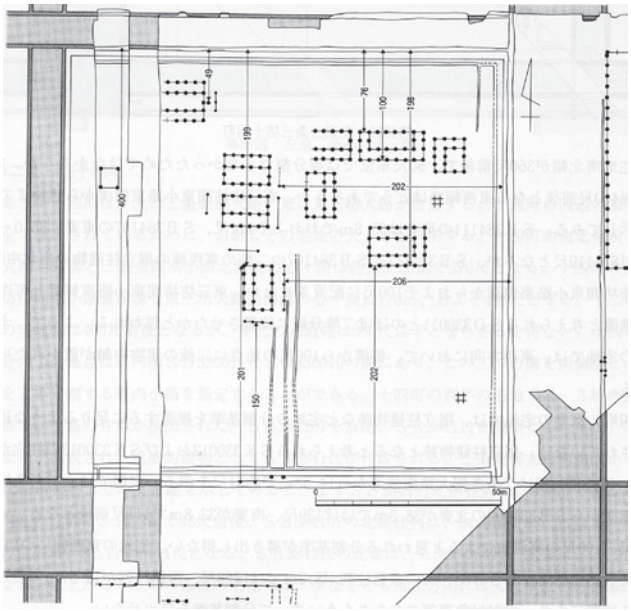
第 10 図

第8図　長岡京跡平面図

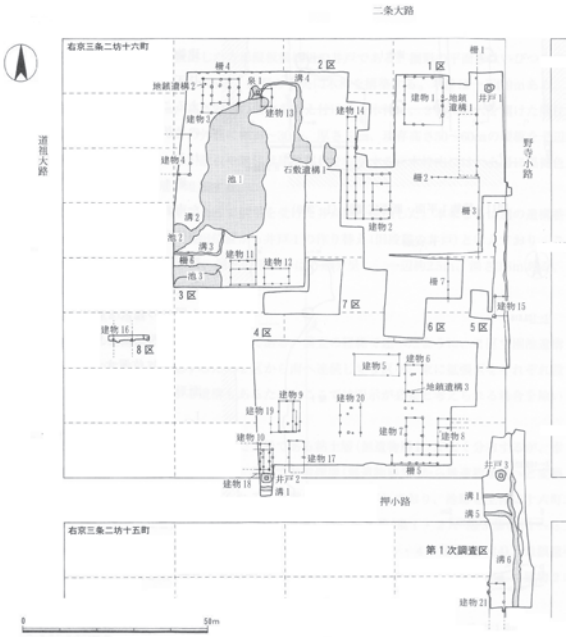


第 11 図

第9図　平安京平面図



第 10 図　長岡京左京二条三坊十五町跡平面図



第 11 図　平安京「斎宮」邸宅跡平面図

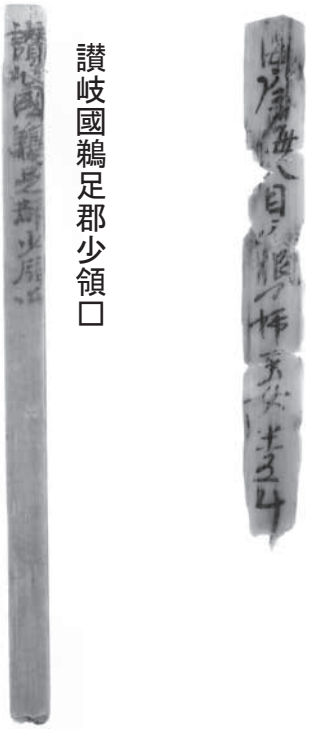
文字の使用と仮名の誕生

第 12 図　内里八丁遺跡出土陶枕

第 13 図　長岡京跡出土
「和同開珎」

第 14 図　平安宮豊楽殿跡出土
緑釉軒瓦

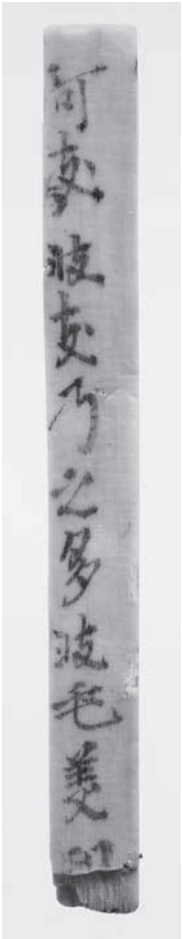
第 15 図　黒岩 1 号窯出土
緑釉陶器椀



讃岐國鵜足郡少領□

海戸主海八目服部姉虫女米五斗

第 16 図　上狛北遺跡出土木簡

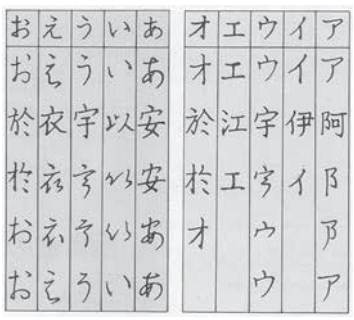


阿支波支乃之多波毛美□

第 17 図　神雄寺跡出土歌木簡

いつのまにわすられ
にけむあふみちはゆめの
□かは□なり
けり

第 18 図　平安宮左兵衛府跡出土「和歌」土師器



お	え	う	い	あ
お	え	う	い	あ
於	衣	宇	以	安
於	衣	宇	以	安
お	え	う	い	あ
お	え	う	い	あ

オ	エ	ウ	イ	ア
オ	エ	ウ	イ	ア
於	江	宇	伊	阿
於	エ	宇	イ	阿
オ		ウ		ア
		ウ		ア

第 19 図　仮名の成立

中世における東アジアとの交流

ー焼き物を通してみた唐物のあこがれから創造への世界ー

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
副主査　伊野近富

1．はじめに

清少納言の『枕草子』には「あをき瓶（中国越州窯の青磁壺）」を使用して、そこに桜の枝を挿して清涼殿の一画を飾っていたことが書かれています。漢詩に多く詠われた花は梅でしたが、和歌に多く詠われた桜はまさに日本を代表する花です。この花を中国の青磁に生けているのです。

また、「きよしと見ゆるもの、土器（かわらけ）」とあり、清浄なるものとして土器（かわらけ）があげられています。釉薬を掛けた中国伝来の青磁と日本の素焼きの土器とは、焼きものの技術的な優劣ではなく、日本人の感性によって使い分けがされていたのです。

なお、中国製の椀と土師器の皿がセットとなり、儀式や宴会で使用され始めるのが中世であり、その用法は、近世初頭まで続きます。

2．秘色と呼ばれたあおいうつわ

紫式部の『源氏物語』には、源氏が末摘花の屋敷を訪れ、「御台、秘色やうの唐土」とあり、ご飯を入れるうつわは秘色（ひそく）と呼ばれた美しい中国越州窯の青磁椀であったと書かれています。稀少な輸入品である唐物を儀式ではなく、生活に密着して使用するなど裕福であったことを想像させる場面が描かれています。

藤原道長が建立した宇治市浄妙寺跡で、中国越州窯の青磁水注が出土しています。これと同様のやきものが、白河院の有力者であった藤原国明の屋敷があった平安京左京四条一坊跡で出土しています。

3．清盛が使った白いうつわ

縁が盛り上がった特徴的な白磁椀は、平氏政権による日宋貿易によって平安時代末期に宋から大量に輸入されました。都である京都はもちろん、京都府内の中世集落遺跡からも出土しています。それまでの中国製陶磁の使用は、貴族が中心でしたが、地方の武士にまで一気に広がったことが分かります。かれらは日常生活はもとより経塚や墓にも白磁を入

れており、豊富な供給量があったことを知ることができます。

また、奈良時代から平安時代中ごろまで日本で生産された銅銭の使用が一時途絶えていたのですが、平安時代末期になって中国の銅銭が大量に輸入されました。当時の貴族は銅銭を求める人々の姿を見て、今、都に流行るものとして「銭の病」と表現しています。最近の成果によれば鎌倉大仏は銅銭を溶かして作られたというのです。流通貨幣以外に原材料としての使い方があったことがわかります。貨幣としての使用は徐々に広がり、13世紀後半には納税は米や絹から銭に転換しています。

4．義満が使った青いうつわ

鎌倉時代になると使用される器が白磁から青磁にかわっていきます。中国龍泉窯で生産された青磁は全国各地で使用されました。特に、椀の外面に蓮弁を施したものがまず流行りますが、義満のころは雷文が流行っています。今のラーメン鉢にある文様です。

義満は日本国王を名乗り、明との交易を推し進めました。この積極性は東アジア諸国にも届いていたようで、15世紀初頭に南蛮船が2度北陸の敦賀･小浜を訪れています。なぜ、日本の玄関口であった大宰府・博多がある北部九州ではなく、北陸なのでしょうか。それは、義満がしばしば北陸から丹後天橋立を訪れており、この情報をもとに直接面会するため南蛮船（これはフィリピンかインドネシアにあった国の船らしい）が九州を素通りしたためと考えられます。

5．西洋と東洋との交流

安土桃山時代に盛んに行われた南蛮貿易により数多くの文物が輸入されました。このころ日本にやってきた宣教師は金箔瓦を葺いた聚楽第や周辺の大名屋敷を見て驚いたという記録を本国がある西洋に送っています。かつて緑釉瓦を葺いていた平安宮の跡地に建てられた聚楽第跡で出土した金箔瓦を今回の展覧会でも展示しています。金箔瓦の裏側に「ME、S] と書かれたものも展示しています。これは、平安京左京近衛西洞院の交差点で出土しました。

また、豪商である糸商人の屋敷（平安京内膳町跡）から出土した木簡には「NAGASAQ」と書かれており、長崎と読めます。中国との生糸交易を進めた京都と長崎などは糸割符仲間としてつながっており、アルファベットが書かれているということは、中国からさらに西洋へのつながりを示しています。

6．秀吉が使った三彩と染付け

現代でも使われている染付け（白地に青色で絵を描いたもの）は戦国時代の終わりごろ

から徐々に輸入されました。秀吉のころには爆発的にその量は増えます。

また、カラフルな中国産三彩陶器は商人などの屋敷でも出土しており、都で多く使用されました。江戸時代初期には楽焼きでそのコピーが製造されています。そして、緑色を好む織部陶に受け継がれ、その技術は現代にも受け継がれています。

さらに、朝鮮王朝の陶磁器をもとに、唐津焼の生産が開始されました。秀吉の朝鮮出兵を大きな契機として始まった唐津焼は急速に生産を拡大していきます。

７．伊万里の始まり

中国が起源の染付けは、西洋へ輸出されました。しかし、中国における明から清への王朝交代は陶磁器生産にも大きな影響を与え、生産力が落ちてしまいました。そこで、唐津焼や伊万里の生産力を知ったオランダ東インド会社は17世紀前半に生産を依頼し、受注した生産者らは、伊万里などの磁器を西洋に送りました。これ以降、多量の伊万里製品が輸出されることとなったのです。英語でCHINAは磁器の代名詞です。それほど中国と陶磁器とのつながりは深かったのですが、伊万里にとってかわられたのです。ちなみに、JAPANは漆器の代名詞です。

８．輸入陶磁器の出土量

京都で出土する輸入陶磁器は中国製がほとんどです。10から11世紀の白磁椀は、前代の越州窯青磁が平安京に集中するのに対して、その出土範囲は広がりを見せます。12世紀になると白磁椀は、京都府内で発掘調査を行った中世の村から必ずと言っていいほど出土します。これらは中国南部の福建省で生産されたものです。その後浙江省の龍泉窯青磁が白磁を圧倒するようになります。この状況は16世紀はじめまで続きますが、その後染付け（青花）や白磁の端反り皿などが増え、青磁の出土数は激減します。

９．おわりに

焼き物の技術は中世を通じて中国が優れており、数多くの磁器が生産・輸出され、日本はこれを輸入しました。しかし、近世になると日本の伊万里でも磁器を生産するようになり、西洋にも輸出するようになります。

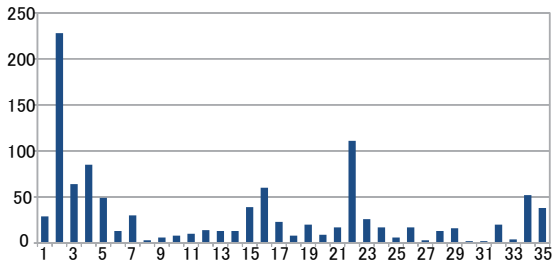
輸入陶磁器に美しさを見いだした感性が、それ以後も受け継がれることになります。

男子像（平安京跡）

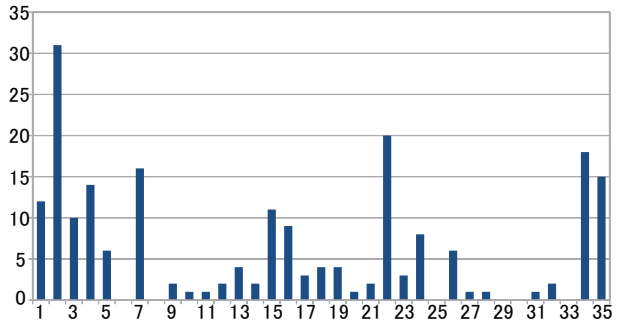
棹ばかりのおもり（シミズ谷城跡）

織部沓茶碗（平安京跡）

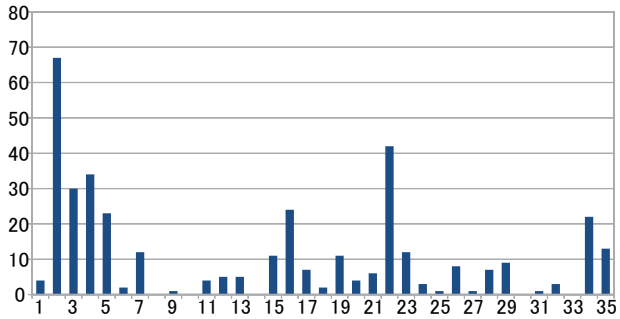
白磁										青白磁			青磁																	鉄釉	雑釉	青磁他	青花		
														龍泉窯													同安窯								
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	
椀Ⅱ	椀Ⅳ	椀Ⅴ	その他椀	皿	口はげ皿	端反皿	高台抉り皿	合子	壺	小壺	合子	椀・杯・皿	越磁	椀Ⅰ	鎬蓮弁文椀	蓮弁文椀	幅広蓮弁文椀	細蓮弁文椀	雷文帯椀	見込み印花文	無文椀	皿	稜花皿	壺	杯・盤	香炉	同安窯椀	同安窯皿	生産地不明	天目茶碗	褐釉・緑釉・その他	高麗・朝鮮	椀	皿	
29	228	64	8 5	49	13	30	3	6	8	10	14	13	13	39	60	23	8	20	9	17	111	26	17	6	17	3	13	16	2	2	20	4	52	38	全体
12	31	10	14	6	0	16	0	2	1	1	2	4	2	11	9	3	4	4	1	2	20	3	8	0	6	1	1	0	0	1	2	0	18	15	丹後
4	67	30	34	23	2	12	0	1	0	4	5	5	0	11	24	7	2	11	4	6	42	12	3	1	8	1	7	9	0	1	3	0	22	13	丹波
13	130	24	37	20	11	2	3	3	7	5	7	4	11	17	27	13	2	5	4	9	49	11	6	5	3	1	5	7	2	0	15	4	12	10	山城



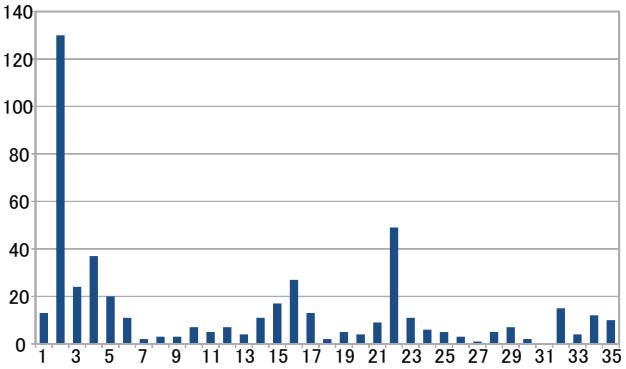
全体



旧丹後国



旧丹波国



旧山城国

京都府内（旧国）出土の輸入陶磁器点数（当調査研究センター調査、1983 ～ 2007 年報告分）

華南三彩盤・織部など（平安京跡）

金箔瓦（聚楽第跡）

腰刀（佐山遺跡）

中国製白磁椀
（佐山遺跡）

中国製青磁鉢
（聚楽第跡）

朝鮮王朝白磁椀
（平安京跡）

中国製白磁壺など（平安京跡）

講師紹介

上田 正昭（うえだ まさあき）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長
京都大学名誉教授、西北大学（中華人民共和国）名誉教授
歴史学者
専攻：日本・アジア古代史
勲二等瑞宝章・修交勲章崇禮章（大韓民国）受章

井上 満郎（いのうえ みつお）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事
京都市歴史資料館長、京都産業大学名誉教授
歴史学者
専攻：日本古代史、東アジア古代史
京都新聞大賞受賞・全国社会教育功労者文部科学大臣表彰

菱田 哲郎（ひしだ てつお）

京都府立大学 文学部 教授
考古学者
専攻：日本考古学、比較考古学
カンボジア王国サハメトレイ勲章受章

討論進行

上原 真人（うえはら まひと）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事
公益財団法人辰馬考古資料館長、京都大学名誉教授
考古学者
専攻：歴史考古学、日本考古学、文化財科学
濱田青陵賞受賞

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER